

肝臓診療マニュアル（第3版）

岡上 武

大阪府済生会吹田医療福祉センター総長

1975 年以来わが国では年々肝臓が増加し、その7割以上をC型肝炎ウイルス（HCV）持続感染者が占めてきた。この背景には第2次世界大戦後の社会の混乱や肺結核患者への積極的な肺葉切除の際の輸血など医療行為を含む種々の要因が関係しており、厚生労働省と日本肝臓学会は罹患者の早期発見と適切な治療の普及のために多くの努力をしてきた。

この間C型肝炎治療法は格段に進歩し、軽減した副作用のもとで高率にウイルスが排除されるようになった。治療の進歩により2005年頃からC型肝炎起因の肝臓が減少に転じ、5年以内にHCV起因の肝臓は50%以下になるのではないかと推定している。一方、過去10年間でいわゆる非B非C肝臓が倍増し、この傾向は今も続いているが、これには生活習慣病に伴う肝疾患である非アルコール性脂肪肝炎（NASH）の増加が原因と考えられている。この間、HBV、HCV、NASH由来の肝臓発症機序の研究は

確実に進展したが、最近増加しているNASH由来の肝臓発症機序に関してはまだまだ不明な点が多い。

このたび、日本肝臓学会から『肝臓診療マニュアル 第3版』が上梓された。2007年に第1版が、2010年に第2版が上梓され、今回5年ぶりに最新の診療マニュアルに改訂された。第1版作成に責任者として参加したこともあり、この本が手元に届いた際、すぐに大変興味深く拝読した。

画像診断機器と造影剤開発の進歩は目覚ましく、近年は1cm未満の早期肝臓が確実に診断できるようになった。その結果としてごく早期の肝臓が数多く診断され、必然的に早期肝臓の病理学的特徴もわが国の研究者により明らかにされてきた。

治療に関してはラジオ波焼灼療法（RFA）を中心とする局所療法は確立された感があり、現在は進行肝臓をいかに治療するか、再発予防をどうするかが、肝臓治療の最重要課題になっている。他の消化器癌に比較すると、肝臓の化学療法に関しては

まだまだといえる。とはいえ、肝臓の基礎的・臨床的研究や実臨床において、多くの分野でわが国は世界をリードしてきたことは間違いのない事実である。

今回の第3版では疫学、病理、発症機序、診断、治療、発症予防などに関して、その方面に造詣の深い第一線の研究者が最新のエビデンスをベースに個々の研究者の研究成果や工夫を加えて、実臨床に役立つ事項を記載している。また肝臓治療薬の開発状況までも記載されており、極めて充実した内容でかつ実用的な肝臓診療マニュアルとなっている。本書が肝臓専門医のみならずこれから肝臓の臨床や研究に従事しようとする若い医師にも広く利用されることを願う次第である。

執筆者ならびに企画広報委員会委員に敬意を表し、書評とさせていただきます。

●B5/頁216/2015年

定価：本体2,800円＋税

[ISBN978-4-260-02167-8]

医学書院 刊